

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
にしだ かずこ 西田 和子	女 性	84歳	18歳	小 畑

- ① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。
豊川海軍工廠^{こうしやう}にいました。
- ② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。
豊川海軍工廠で、ラジオで聞きました。
- ③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子
ああ、やっと戦争が終わった。空襲^{くうしゆう}がなくなり、安心した。
- ④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「豊川海軍工廠の熱き一日 ～ 目の前で友だちが…」

私は、作手^{けんたい}の見代出身で、新城^{せんこう}に下宿して新城高等女学校の専攻^{せんこう}科に通っていました。

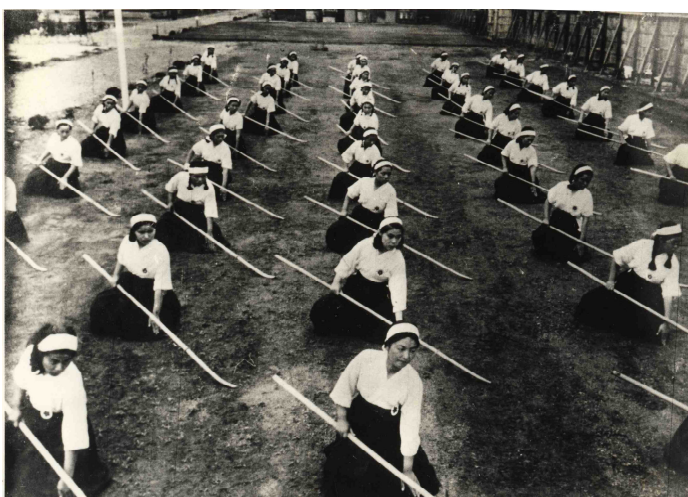
昭和19年4月に、専攻科から10名ほど豊川海軍工廠に女子挺身隊^{ていしんたい}*1として動員されました。第一機銃工場^{きじゆう}で25ミリ機銃や鉄砲^{てつぽう}の弾丸^{だんがん}を作っていました。

女子は1班から3班までに分かれていて、班ごとに行動していました。一つの班が6人ほどで、私は2班に所属していました。

昭和20年8月7日、朝、出廠^{しゅつしやう}すると、ジージージーと東海軍管区情報と事務所から聞こえる声にハッとして、いつもと違う気配を感じました。東海軍管区情報は、すぐに退避^{たいひ}できるように工場内で聞こえるようになっていました。

行動が速かった第1班は、点呼^{てんこ}をすばやくとり、正門に向かって走り始めたところ、爆弾^{ばくだん}が炸裂^{さくれつ}しました。大きな穴が開き、ほとんどの子が吹き飛ばされて亡くなりました。敵機^{てつき}が近くて、私たち2班は点呼^{てんこ}をとる暇もなく、仮の壕^{ごう}に退避^{たいひ}せよと言われました。サイレンが鳴りひびきます。

「ドカーン！ドカーン！」ものすごい音と地ひびきです。あっという間に空襲が始まり、近くに爆弾がいっぱい落ちました。



▲ 女子挺身隊なぎなた訓練 (写真提供：桜ヶ丘ミュージアム)

*1 太平洋戦争後期に、一億総動員のスローガンの下、労働力不足をおぎなうため、無職で未婚^{みこん}の女性を動員して、地区ごとにつくられた勤労動員組織^{きんろう}をいう。正式名は女子勤労挺身隊。満12歳以上40歳未満の女性は居住地や学校ごとに組織され、軍需工場などで勤労奉仕^{しほう}として働いた。隊員数は47万人をこえていたといわれる。軍需工場への空襲により多くの挺身隊員が死亡した。(ポプラディアネットより)

最後に壕に入った私は、爆風で壕の中にたたき込まれました。壕の中は5，6人が入れる広さで、高さは2 mぐらいありました。セメントの下に掘られた壕ですが、直撃されればひとたまりもありません。班長が「早く出ましょう！」と、壕のふたを開けると、「今出ると危ない！」という声が聞こえ、ふたを閉じてしまいました。すると、反対の出口から火の粉や煙が入り、苦しくてたまらない。熱風と風圧で息ができないのです。しばらくの間じっとしていましたが、「ここは危ない！早く出よう！」と、2班は班長を先頭に順々に飛び出ていきました。

私と二人になった豊橋の村松さんが、「いっしょに逃げまい。」と言って、私の前を一步出たところ、「バ～ン！！」と大きな音がしてあたりが真っ暗やみになりました。私より先に出た2班の子たちは、みんな吹き飛ばされました。

「村松さん、村松さ～ん、……………」、何度呼んでも返事がありません。仕方がないので、私は煙の静まるのを見て西の方へ逃げました。ただ一人で西の方へ西の方へと走り続けました。爆音がするたびに伏せて、また走りました。いくつも爆弾でえぐられた大きな穴がポツカリあいていました。中には、だれとも分からないもぎとられた手足が散乱しています。私は必死で逃げました。

しばらく行くと、大勢の人がぞろぞろ歩いて行くのが見えました。うしろをふり向くと、廠内は煙が上がり、火の海でした。妹が小坂井小学校の仮の事務所にいましたので、そこに寄り、安否を確かめて帰りました。村松さんは、国府高校の体育館に運ばれ、3日後に亡くなったそうです。

あとから分かったことですが、爆弾が落とされた時間はわずか26分間だったそうです。その間に、2,500人あまりの人が亡くなったんです。

小畑でも3人の若い女性が亡くなっています。

空襲で破壊された正門付近（写真提供 桜ヶ丘ミュージアム）

